

有峰はダム建設計画による廃村(1921)となって今年(2022年)で101年、このダムの完成(1960年)による水没から61年となった。有峰は、標高1000mを越える高原盆地で、平地から隔絶した県境の僻遠の地と言われてきた。有峰に生まれ育った有峰人は、現在ほとんどおらず、その末裔の人々に伝承された話をなかなか聞けない状況下にある。一方、この有峰において育まれていた森林文化を伝えるべく有峰森林文化村が開村して20年を迎えている。

有峰での平均気温は7.9℃と富山市より約6℃低く、夏は冷涼、冬は厳しい日本海型の気象パターンを示し、平均積雪は3.2m、最深積雪は4mを越えることもある。この地における有峰の歴史を下記に示した。

有峰の歴史

鎌倉時代	東谷宮の木造狛犬(通称サル)吽形、1334年ごろに制作
戦国時代	1522年中地山城の落ち武者が隠棲(越中国誌) 1595年(文禄4年)年貢割符 検地の結果60俵2斗5升
江戸時代	1605年(34軒)→1616年(24軒)→1619年(15軒) 1668年(35軒)→1813年(26軒) 1836年(24軒)→1840年(12軒)→1920年(12軒) 100-130人が生活 1837年(天保8年)の大飢饉の後、戸数は12に限定 1964年(元禄年間)まで有峰は「うれ」と呼ばれていた 1695年有嶺(うれい)を訓読し、有峰(ありみね)に改名 ヒエを主食、ワラビ粉1升は米4斗と交換
明治時代	戸数が15-17個に増加、夏の間、授業が行われる
大正時代	1920年(大正9)に有峰の山林(14196ha)を富山県が買収、離村 村民一人当たり約1万3千円を手にし、転居(富山、大沢野など)
昭和時代	1939年(昭和14)有峰ダム着工 1960年(昭和35)有峰ダム完成 (堤高140m、総貯水量2億2千万 ³ 、82万KWh) 1973年有峰県立自然公園に指定
平成時代	2002年有峰森林文化村が開村

有峰には、鎌倉時代(1334年)から大正9年(1920年)まで、先人有峰人が住んでいた。有峰人は、過酷な自然の中に生き、森に依存し、森に生かされ、森と共生し、森と一体となった生活を長く続け、そこには気高い森林文化があった。森林文化とは、森林と人間とがひとつに融け合っ
てつくりあげた文化である。有峰における森林文化を語るには、有峰の歴史、民俗や有峰人の
生業について学ぶ必要がある。今回は、有峰森林文化村のシンボルマークと先人有峰人が制
作した狛犬との関係や有峰人の叡知“あがりこ”について紹介する。

○有峰森林文化村のシンボルマーク(ロゴ)と先人有峰人が制作した狛犬との関係

有峰森林文化村のシンボルマークは、かつて有峰東谷宮本殿の店棚に祀られた開口の狛犬「阿」、閉口の狛犬「吽」の表情と、天然林のブナとミズナラの葉を一体化させたデザイン(図案)で、有峰人の信仰の象徴狛犬と有峰の主要樹種ブナやミズナラとをモチーフした有峰の森林文化の象徴といえる。本来狛犬は、「魔除け」や「守護」に役割を担っていたとされるが、有峰では、薬師岳に登攀できない有峰人がこの狛犬をご神体のように拜んでいたようである。



有峰東谷の宮に置かれていた4対8体の狛犬
有峰の狛犬(通常サル)
富山市指定有形民俗文化財
年代:1334年頃 / 材質:ヒノキ科の一種



水と緑といのちの森を永遠に
有峰森林文化村

有峰の狛犬をデザインモチーフにした有峰森林文化村のシンボルマーク

○有峰に分布する奇形木“あがりこ”から有峰人の叡知を学ぶ

有峰は、山菜採りやキノコ採りにとっては魅力的な場所で、春や秋には、これらを目的に有峰を訪れる人々も多い。有峰は1000mを越える高原盆地で米が取れなかったため、有峰人は、穀物として稗、粟、蕎麦などに頼らざるをえない環境下にあった。このため春には、ウド、フキノトウ、ススタケ(ネマガリタケ)、コゴミ(クサソテツ)、ゼンマイ、ワラビやヨシナ(ウワバミソウ)などの山菜、秋には、マイタケ、ブナシメジやナメコなどのキノコ類に依存する比率は極めて高く、秋の恵みトチの実も大切な食料として利用していた。

また有峰は、ブナ、ミズナラ、トチ、クロベなどの木材資源にも恵まれていたため、有峰人は建築材(柱目)としてクロベを、薪燃料(木呂)として、ブナ、ミズナラやトチノキなどを利用していた。有峰人は、ブナ、ミズナラやトチノキを残雪期にソリを使って伐採、切り出し、利用していた。冷夕谷遊歩道や桐山森林管理歩道、西谷付近では、この痕跡を“あがりこ”として観察することができる。

「あがりこ」とは、豪雪地帯特有のブナの特殊な樹形をあらわし、ブナの木の前や太い枝を利用するため残雪期に雪上で伐採すると、地上2から3メートル程度のところで切ることとなる。これを繰り返すと、切った付近の幹がコブ状に膨れて大きくなり、「あがりこ」と呼ばれる樹形が出来上がる。有峰では、トチノキのあがりこが多く、ブナやミズナラでも見ることができる。

「あがりこ」は、有峰人が「森の恵み」を枯渇させることなく利用し続けてきた「有峰人の叡知」の結晶であり現在も見ることのできる森林文化ともいえる。

一方で有峰の山菜やキノコなどの森林資源は有限である。とりすぎになるとやがて枯渇につながります。有峰は全域が県立自然公園に指定されておりマナーを守り、節度ある活動が望まれます。



冷夕谷遊歩道で見られる
トチノキのあがりこ
(2019年5月撮影)



西谷で見られるブナのあがりこ
(2019年6月撮影)

参考文献

- 1) 前田 英雄編 有峰の記憶/桂書房
- 2) 有峰森林文化村基本構想検討会 有峰森林文化村基本構想